

- 17 「傳宗尊親王筆歌合巻研究」
18 『^録類聚歌合とその研究』二〇六頁
19 『花山院の生涯』一七一頁
20 21 『平安朝歌合大成二』
22 「平安博物館紀要」五
23 拙稿「藤原相如考」参照
24 25 『王朝文学の研究』所収「仲文試論」。
26 『契沖全集』第十四巻、六九頁
27 『小石記』永祿元年三月十三日条
28 「藤原仲文覚え書」（「言語と文芸」昭和四十二年十一月）
29 『日本紀略』安和二年四月二日条「藤原千晴配^二流隱岐国^一」の千晴か。
付記 稿をなすにあたり、静岡大学の後藤昭雄氏から示唆御教示を得た。
記して御礼申し上げます。
本研究は昭和五十年文部省科学研究助成による研究の一部である。

〔論文受理、一九七五・九・三〇〕

氏の日に日に強まる時代背景の下にあって、文章道に於ても**起家**の西曹、東曹に学ぶものが多くなり、その中から人材の輩出した時期。そうした中にあるのは、よほどの才能が無ければ、累代の学者としての位置を正統に保つことは不可能であつたらう。輔昭もまた一流とするには才能の乏しさを如何ともし難かつたといわねばならない。その苦悩を背負っていたことと思うが、それだけに父文時などとは異つた一種の諦め切つた境地が一方にあつたものと思われる。

沈論を嘆く歌がない——同様のことは、江家の傍系の出ではあつたが、輔昭と同様文章道に志し文章生出身ながら大成出来なかつた大江嘉言にもみられたことであつた。嘉言も公の場では勿論改つた歌を詠んだが、私的な場、旅の歌などに、のんびりとしたこだわりをなさを示している。藤原相如にしても同様のことが言えるが、これはあたかも輔昭が仲文と戯れ、かけ合つて言葉の遊戯に笑いさぐめく姿と通うものがある。仲文とても沈論に甘んじねばならない一官人にすぎなかつた。程度の差こそあれ、やゝ後の明衡に代表される文人たちが、やゝ正道から外れた文芸を弄んだにも似た傾向——いわば文章道くづれとか文人くづれとかいった——一つの傾向がこの人々の中にもひそんでいたのではなかつたかと思う。初志を貫きえなかつた人々、男子として第一文芸の漢詩文、学問の場からあふれた文人たちの中に、諦め切つてはいるものゝやはり息吹いている現実には、はけ口を求めざるをえなかつた——そうしたものがふざけの形をとつて表れ、類を呼び、まじめな官人としての位置を保

ちながらも、やゝ文人くづれ的な交友や遊びが一方に存したのではなかつたかと思われる。

[注]

- 1 撰関侍読の項。「清慎公」菅原雅規(内膳守)
- 2 『和漢朗詠集』所収菅原雅規「暮春藤垂相山莊尚幽会詩」醉對山花心自靜 眠思余淚先紅。と、類従本所収「粟田左府尚幽会詩」における雅規息資忠の詩文の中の「中有二家翁蒲柳景二」による。
- 3 「菅原文時伝」貞壁俊信(「国学院大学日本文化研究所紀要33」)
- 4 「日本紀略」応和二年六月十七日条。
- 5 「尊卑分脉」は「安果」とするが「安果」が正しい。
- 6 「本朝文粹」卷十所収「春同ク賦ニ隔レテ花ヲ遙ニ勸ムト云フヲ酒ヲ。応ニ太上皇ノ製ニ。」の「輔昭派二」シコト 於李門之浪二三年。」による。
- 7 「本朝文粹」卷六「請下殊蒙二天恩ヲ。被レシコトヲ給セ中学問料ヲ男無位惟熙ニ状」
- 8 前掲「菅原文時伝」
- 9 「文学研究」第七十一輯(昭和四十九年三月)
- 10 貞壁氏が前掲論文に於て「宗血脉鈔」の寛弘五年十二月八十六才で入滅の記事により逆算されたものによる。
- 11 「日本詩紀」には「三首」とし「春日山居」をのせるが、これは誤り。川口久雄氏の説による。
- 12 古典大系 和漢朗詠集注
- 13 古典大系『和漢朗詠集』363・364番
- 14 「拾芥抄」諸名所部第二十二「一条南大宮東二町、謙徳公家、又為二法住寺大臣為光家一也、」
- 15 「平安朝歌合大成」二 参照。
- 16 類従本長能集奥書所引九歌仙伝の「永観二年卅六才」から逆算

祭の使の帰りを迎えている場面でもあり、輔昭なる人物が別人とは考えがたい。私家集の詞書などの中には、舞人や倍従をも含めて「祭の使」と表現されたと思われる記載があるので、こゝもそうした類であらう。

公任は天元三年二月廿五日正五下（十五才で元服）。七月一日任侍從。四年正月七日從四位下（『公卿補任』尻付による）となっているから舞人の名前が明らかでないので憶測の域を出ないが、五位、或は四位の舞人として撰ばれ加った時のことではなかったか。

少年公任との関係を知る一こまである。歌道に於てすでに卓越した才能のきざしを見せ始めていた少年公任には、老境に入らんとする仲文や輔昭の存在はよき供人でもあり歌を介してのよき御相手でもあつたことであらう。

後年公任は「前十五番歌合」に輔昭、仲文二人の歌を番えて採った。

十番

仲文

19 ありあけのつきのひかりをまつほどにわがよのいたくふけにけるかな

輔昭

20 まだじらぬふるさとびとはけふまでにこむとたのめしわれをま
つらむ

北村杏子氏²⁸ も述べられるように、忘れがたい少年の日の交友が公任の脳裡をかすめたであろうことは想像にかたくない。

輔昭のこの歌は、『新古今集』に「題しらず」として、『金玉集』には、異同があるが、藤原千晴の代作らしく²⁴⁾

ちほるかあつまのくにより × × × × × × ×
 なににらかなすべき事ありて、東より京にまうてきて侍けるに俄
 × × × × × × ×
 におほやけことにかゝりてことかたのしをきにつかはしけるに
 × × × × × × ×
 あれにかはりて (類従本。 校異ハ穂久邇本

と詞書してとられている。

また前述した「春風はのどけるべし八重よりもかさねて匂へ山吹の花」が、公任撰に成るといわれる『如意宝集』『拾遺抄』に採られていることも、公任が「歌人輔昭」としてその歌のよさを認めていたからに他ならないであろう。

六
むすびにかえて

以上、乏しいながら現存資料から菅輔昭の家系、文人・歌人としての生活・交友などについてみてきた。

和歌に關しては、現存歌数が極めて少いため決定的なことは言えないが、總じて上から下へと詠み下したなだらかな歌柄ながら、そこに何となく余情を感じさせる歌風といえる。それは拾遺集時代の美意識になつた風であつたと言えよう。また、沈淪を嘆く歌はみられないようである。冷泉院の詩会での詩序に「輔昭訴_レ於_二李門之浪_一二年。朝恩未_レ及。云々」とは詠んだが、文時が「三条左大臣家前栽歌合」で「水の面に月の沈むをみざりせば我ひとりとや思ひはてまし」とよみ、「老閑行」に沈淪を嘆じたようなかげは、その後の輔昭にはみられない。衰退の色しのび寄る菅家に生を受け、藤原

御車にことゝもあるへし、たらにゑさうしに花のちるをみたまふ、むかしの御むろのまへなるはなのいたうちるをとりあつめて、すけあきら

45 花のちるむろはむかしの道なからけの庭にはあとはかもなしといふに

46 桜はな露にぬれつゝ尋ぬれはいにしへしるき宿の庭哉

このつゐてに、すけあきら、とをくしくいぬへき事などいひて

47 すきかたき花につけてそ都出てゆかまものうき東路のかせ

すけあきら

48 春過てちる花たにもある物を老の身をたゝ思ひやらなん

「女御殿」は公任の姉、円融院の女御遵子のことであろう。遵子が女御であつたのは天元元年五月廿二日から天元五年三月十一日中宮となられる（日本紀略）に至る四年間であつた。松崎の念仏におしのびで参られたのは天元五年の明日に立后をひかえての御出ましは考えがたいから二年、三年、四年のいづれかの三月十日のことゝ察せられる。

遵子は仏心にあつく恵心僧都（源信）に帰依していた旨『大鏡』にもみえる。また、『公任卿集』には他に「松がさきのこうきうあざり」との贈答歌もみられ、『朝光集』にも「ちせん阿闍梨まつがさきに修法するに」、『日本紀略』には正暦三年「中納言保光、供養松崎

円明寺」などみられるから、松崎での仏事は多かつたのであろう。これは女御にお付きした公任と輔昭の贈答である。康保三年生れの公任十四ゝ十六才のこととなる。

『仲文集』に「しもつけのかみすけあきらといひかはしたわふるしことありて」とあり、輔昭が下野守であつた旨がみえるが、47 48 の公任との贈答からも、輔昭が東国に何らかの関係ある頃のことであつたらしく察せられる。輔昭の「とおくしくいぬべきこと」、公任歌の「東路の風」がそれを暗示しているように思う。輔昭の年若い公任に語りかける飾らぬ心境であろう。主人筋に対して官位の滞を訴える訴嘆調の歌とは異なり、しみじみとした感慨がある。

また同じく『公任卿集』に仲文を交えた次の贈答がみられる。

りんしのまつりのつかひしてかへりたるに、ふねに、すけあきら

338 岩清水かさしのふちの打なひき君にそ神も心よせける

返し

339 水上の心はしらす岩しみつ波のをりこし藤にやはあらぬ

おなしおりに、なかふ

340 石清水きのふの藤の花を見て神の心もくみてしりにき

公任が臨時祭の使の一団に加つた時のことであろう。公任の「祭の使」は、左近中将兼蔵人頭であつた永祚元年のことであり、²⁷⁾その時とすれば輔昭はすでに故人となつていた。しかしここは仲文と共に

ことか

かへし

すけあきら

76 つくまえのこひや見ゆるといのちをそかひにやりつるつるのこ
ほりへ

の贈答がある。

この贈答については、今井源衛先生の御論考⁽²⁴⁾があるので参考させていただく。

「つくま」は近江国坂田郡の地名で、筑摩神社がある。この神社の祭礼には、土地の女は、それまでに関係を結んだ男の数だけ土鍋をかぶって参詣奉納する風習があった。「鶴の郡」は甲斐の国に在り、菊の群生する霊山があつて、そこを流れる水をのむと鶴の如く長寿を得るといわれている。さて、この贈答歌は舟道遙の「舟」を「鮒」と勘違いした従者の言葉を材料として、「鮒」↓「近江鮒」、「買ひ」↓「甲斐」へ、「近江鮒」↓「筑摩の祭」↓「恋（鯉）」↓「命」↓「鶴の郡」へと次々に連想を発展させ、機智を弄して「詞書と相突つて、さながら一篇の笑話をな⁽²⁵⁾」している。

従者の勘違いをとらえて、これはおもしろいとばかり戯れ笑い興じているいかにも気のおけない二人のからりと開つびろげな様である。仲文の歌は「河社」⁽²⁶⁾に「おおよそ誹諧なり」と評される如く概して徹底した皮肉、攻撃、戯れぶりを見せる。輔昭は現存歌の少いせいもあつて仲文との贈答以外にはこうした傾向を見ないが、それが時代的傾向に帰せられるものかまた個性に帰するものか、その境遇

に由来するものか決しかたいとしても、内面につねに鬱積される何物かがからりとはじき出されるような無責任な戯れと笑い——輔昭にもこうした歌の存することは一応注目しておかなければならない事であろうと思う。

なお仲文はその家が隣接していたことから三条の大臣・公任とも親交があり、冷泉院の東宮時代の蔵人でもあつた。そうしたことから後に冷泉院の蔵人となり、三条の大臣実頼の庇護の下にあつた輔昭とも近づくことゝなつたのであろう。

(三) 公任との交友

最後に公任との交りについて見よう。

三条左大臣の庇護を受けた輔昭は、当然のことながらその息公任とも交友があつた。『公任卿集』には、輔昭のかゝわる次の一連の贈答がある。少し長いが状況がわかる程にあげてみたい。

〈書陵部本 五〇一・七三九〉

三月十よ日、松かさきの念仏きゝに、女御うへなとしのひ
ておはしけるにみちのほと、月おほろにて、風のかゑなと
はるかなり、女御とのゝ御

(40 歌省略)

(中略)

夜ひとよ、たうときこときゝあかして、暁方にみれば、よ
るちりける花のやり水のなみによせられて、すわうかひの
さまなるに、さくらかひとはこれをやなといひて

ない。

因みに『能宣集』には

相如が家にて月あかきよ、やり水のもとにて人くよみ侍し
419 みなかみにながれたえずばこのやどにちよありあけの月のかげ

みむ

とあり、能宣も又相如邸の親しい客人であつたが「人くよみ侍りし」とあるように、ここには風雅の士の誰彼が集い、東山に出る月のさやけさを賞で歌会を催したらしい。輔昭もその「人く」の一人たりえたであろう可能性は強いのではないかと思われる。

さらにまた『元輔集』にも

すけゆきが家に冬の月の面白きにまかりて侍りしに

19238 いざ斯ており明してむ冬の月春の花にも劣らざりけり

があり、やはり歌を通しての雅交の場の提供者だった相如と交友のあつたことが知られている。

輔昭も元輔とは前述の為光家歌合、三条左大臣家前裁歌合で共に歌人として同座しているし、二人の間に交友関係が全く無かつたとする事は出来ないであろう。また、さきに輔昭の詩に「饒源能州赴任」があり、若しや「源能州」は源順ではなかつたか、と思われる旨述べたが、若しそうとすれば、輔昭もまた相如同様、元輔、能宣、或は順ら後撰作者の圈内へ加わりうる可能性を持ち、これは或意味に於て見すごせない重要さをもつ。

(二) 仲文との交友

『仲文集』には次の贈答歌がある。(書陵部本による)

しもつけのかみすけあきらいひかはし、たはふるしこと
ありて、すけあきら

70 わかたのむかさまのとしのしるしあらはすきにし身とをかくす
もあらなむ

かへし

71 かさまをはかけすまゝなむあさゆふにみやのめならふおのれな
らひに

(とて、宮のめのところはくけしきにかすめてかきたり、
めはみやにさふらふ、四君かへし

(一) 以下は四君と仲文の贈答となるので省略する。

笠間の神は、もと稲荷三社に祀られ、高御魂以下五柱を合祀し、
延命長寿、子孫繁昌、福德円満を祈った。宮咩^{みやのめ} ともいう。何を言
かわしたわぶれたか、詞書からは必ずしも定かではないが、笠間の
神の「宮咩」を「宮の女」にかけて戯れごとをしている二人である。

また

とのにさふらひて、すけあきらとふたり、ふなせうえうせ
むとさためて、すさのみゆるに、ぬしはふなはいかにとい
へは、いまかひにこそはつかはさめといひたるに、いひや
る

75 めにちかきわれをおきてあふみふなかひへやりつといふはま

をやりてむ

八月許にまらうどあまたまうできてよふくるまで侍にこう
じてかはらけとりて輔昭

378 秋の露おきふるしなるくさまくらこよひはたびにあかすべき
かな

といひはべりしかば

379 わがやどにあまたゝびこばくさまくらゆうさりまでにまちこ

そはせめ

（西本願寺本 能宣集）

前者三〇二番の能宣のはなむけの歌に対する輔昭の返歌が無くて
残念であるが、なにか公の使命でも帯びて筑紫国に下ったのであ
るか。

輔昭の経歴については定かなものが無く、「右衛門尉」であった
時期についても不明と言わざるをえない。が、臈谷寿氏の「十世紀
に於ける左右衛門府官人の研究——尉を中心として」²²と題する詳
しい御論考の中に、ただ尉とのみ記されているとき、大尉は一応左
右二人ずつであったので多くは少尉と考えて差支えなからうこと、
また、数的に多い右衛門尉の蔵人兼官の中には、まれに院蔵人や坊
官蔵人があり、勿論蔵人を兼ねているものの中で検非違使をも兼ね
ているものがあること、等々についても開明されているので、或は
輔昭の「右衛門尉」もおそらくは「少尉」で、その時期は冷泉院（円
融期）の蔵人であった天延二年頃に重ねて考えることが出来るので
はないかと思う。

また後者三七八・三七九の贈答は、輔昭が能宣邸を訪れた夜のも
のであり、他の客人がなかなか帰ってくれなくてにがり切っている
輔昭となだめる能宣の姿からは、気のおけない交友関係が察せられ
る。能宣の方が年長ではあるが年令差もあまりなく、共に実頼の厚
遇を受けた仲であった。

こゝで思いあたるのが相如との交友である。さき一条家との関
係でふれたが、『相如集』には

花山のみかとうまれたまひて後比なれはいとめてたうけう
して物かつけられけりとかやをもしらすすけあきらのもと
へやりし

きてもみる人しなればわかやとのもみちはよものかせにまかせ
つ

の一首があつて、安和元年十月末のこと。散りぎわの一きわ美しか
った庭の紅葉が惜しくて心待ちしていたけれど、来訪がないので、
もう風にまかせてしまいましたと、なかなか来訪しない輔昭に対し
て暗に来訪をうながし、恨み言を述べたものであろう。輔昭もまた
『栄花物語』に語られている「池やり水山などありて、いとお
かしうつくりたてゝ」優雅に住みなしていた中川の相如邸にしばしば
出入りする一人だったものと思われる。『相如集』に見られる相如
の歌の性格は明るく、機智的な陽気さをしのばせるものがあり、ふ
ぎけた一面の窺える場面もある。後に述べる仲文と輔昭の關係に
も以た性格の一面が相如との交友關係にも或いはあったのかも知れ

28 きみにこそとはまほしけれちゝのあきのみつつきとのおな

しこゝろを

29 うちなひくきしのほとりのはなすゝきなみのこゝろをよする

なるへし

30 くさむらのなかによをふるきりくすむかしのあきやおもひ

いつらむ

このうち28が、後代「夫木抄」に採られている。

萩谷氏が本歌合に参加した東西歌人を含む多くの人々に言及して、本歌合の人的構成は主催者頼忠の小野宮家を中心に縁故を以て集り、当代一流の歌人を集めたばかりでなく、頼忠の好尚もあって、漢詩文家も多く合流しているが、しかもそれが早く世を去ってその家門が繁栄しなかった時平の門統と弟師輔に押されてその児孫が政権の主座よりすべりつつあった実頼の門統との合作であるところに、本歌合が、いわゆる晴儀の歌合の華かさよりも花鳥風月に詩情を翫ぶ隠逸の趣味に偏った傾向を有している事情が理解せられるのである。⁽²¹⁾

と、注目すべき御見解を述べておられる。

文壇の担い手である和漢の文人たちが頼忠の庇護をうけねばならぬ社会的地位の低きでもあり、それが当時文壇の実状でもあった点に注目を要しよう。文時父子とても決してその例外ではなかった。

(三) 屏風絵の歌

『拾遺集』一〇六〇番に輔昭の次の歌がある。⁽²²⁾ 和漢兼作集にも所収

屏風のゑに花のもとにあみひく所

浦人は霞をあみにむすべばや浪の花をもとめて引くらむ

『兼澄集』の「屏風のゑに花おもしろきところあまふねのわたり侍りしに」と同様、『海辺に花を配して春の海を画いた』(『上代倭絵全史』^{P 107})「屏風絵をよんだ歌であるが、同じ情景の詞書を持つ歌を見出しえず、そのよみぶりからも恐らくは誰か然るべき所の屏風の絵をよんだものであらうと思われるが、如何なる折の詠か明らかにする事が出来ない。

屏風絵の歌はこれ一首しか残っていないが、一首なりとも屏風歌の断片が現存することは後撰から拾遺集時代に生きた輔昭の歌壇活動の一端を示す貴重な資料であるといえる。

以上によって、ほぼ輔昭の歌人としての社会的位置を知り得よう。

五 交友

(一) 能宣、相如らとの交友

梨壺の五歌仙の一人大中臣能宣とは、前述の「三条左大臣家歌合」にも共に歌人として出詠したが、個人的な交友を示すものに次の贈答がある。

七月一日右衛門尉輔昭がつくしへくだり侍に人く 餞し侍、
かはらけとりて

302 たのばたのちぎりもちかきころしもやくもるはるかに人^(なカ)

これに関連して「兵部大輔昭」の官と作歌年次への疑問。本歌合より二年余り後の貞元二年八月十六日に行れた三条左大臣家歌合での輔昭の現在称「仁部大丞」との矛盾である。官位は相当しない場合が多いが、「仁部大丞」の正六位下相当に対して、それより二年余前の官が兵部大輔正五位下相当官であることは、やはり疑問である。「兵部大丞」などの誤りでない限り、本歌合が貞元二年の歌合より後に行れたと見るのが妥当と思われること、及び輔昭の歌が「三月閏月ありける年」の作であること——天元三年の作ではないか——の疑問。

「帯刀先生長能」について、長能が東宮花山「院」に早くから近づいたのは、長能の妹婿に当る藤原為雅の娘が義懐の室であった関係から、義懐が当時すでに歌人として名の高かった長能を皇太子の相手として選んだのではなかったか⁽¹⁹⁾との今井源衛先生の御見解通りと思うが、その時期が東宮侍衛長をつとめた事と関連しないか。

また東宮侍衛長となつたのは義懐の東宮亮就任（天元二年七月一日。
（東宮十二才））と関係がないか。などについての疑問である。結論的には、天元三年、大納言為光が本歌合を催したとは考えられないか、への疑問である。

今更不要な疑問とされるかも知れないが、一応疑問点のみを提示しておきたい。

貞元二年八月十六日、当時文壇の庇護者を自ら任じていた三条左

大臣頼忠による前裁合が催された。

月影の映る四条後院の遣水に臨み、東西に座をわかし、くさむらの虫の音をききながら夜を徹して雅境にひたり、即吟三首ずつが詠進された。

撰ばれた歌人は、東に能宣、時文、元輔、為頼、在原ひでき、保胤。西に兼盛、順、重之、輔昭、正通、光舒であつたが、見るごとく梨壺の五人の中の時文、元輔、能宣、順をはじめとする当代有数の歌人、文人たちであつた⁽²⁰⁾。こうした歌人の一人として輔昭が撰れていることは見過せないことであろう。

時に七十九才の式部権大輔であつた輔昭の父文時は、この夜、序者をつとめ三題の歌題を献じた。すなわちその序は次のとおりである。

左丞相花亭遊宴ノ和歌序

菅 三 品

于^レ時秋也。垂^ニ涼夜之闌晦^一。望^ニ前庭之風流^一。月浮^レ水
ニ。虫吟^レ花^ニ。情感忽^チ催^シヌ。賞翫^セバ可^レシ快^{カル}。於^レ是
ニ喚^ビ堪^ニ。和詞^ニ者十有二人^上。賜^ニ其^一席^ヲ於^レ游溪之
東西^ニ。蓋^ニ憐^レムナリ。秋之易^キ過^ギ。吏部員外大卿菅原文時。
不^レ期^セ而會^ス矣。即^チ令^レ献^ニ題目^一。所謂水上ノ秋月。岸
頭^ノ黄花。藜中^ノ夜虫^{トイフ}是^レナリ也。即^チ其^一詞^ニ云ク。

（『本朝文粹』十一）

輔昭はこの夜次の三首を詠進した。

長能もこの年二十七才¹⁶⁾、歌人としての名声もすでに高くなりつつあった頃かと思われる。長能に比しては相当年長でもあったろう輔昭ではあるが、こゝでは輔昭の歌人としての力量を見るべきであろう。

輔昭のこの歌は、『如意宝集』『拾遺抄』『拾遺集』に入り、共に「三月閏月ありける年」の詠作としている。またさらに「後六六撰」にも入集した。当時賞揚された歌の一つでもあったろうか。又元輔と座を連ねていることも注目し得ることである。

輔昭と一条家との関係を示す資料としては、他に『相如集』六四番の詞書に

花山のみかどうまれたまひて後比なればいとめでたうけうじ
て物かづけられけりとかやをもしろすけあきらのもとへや
りし

があり、安和元年十月二十六日花山帝誕生後の一条摂政家のあふれるよろこびの中に輔昭の存在をも見出すことによって、伊尹在世當時からの関係を知ることが出来る。

さてこの歌合の年代について、さきに「伝承によれば」と記したが、諸本天延三年三月十日であって異説の無い旨は明かになっている。しかし、天延三年当時、為光はまだ従三位中納言兼中宮大夫であって、大納言に至っていなかった。この疑問点について久曾神昇氏は、当時正三位大納言の一条左大臣源雅信を推定され¹⁷⁾、堀部正二

氏は、それを注目すべき見解として注目されたが結局は旧説に従った方が無難の見解にとゞまられた。又萩谷朴氏はこれらの上に立って、作者の人名と現在称の点から「よしちか君」「参河権守惟成」をとり上げ、改めて検討を加えられ、次の如く結論された。

十卷本目錄その他の根本資料がこれを一条中納言と呼ばず、一条大納言と呼んだのは為光の官歴中、貞元二年四月以来寛和二年七月右大臣に到るまで八年に余る大納言の任期が最も長かったことによって、後世凡そその頃の為光を指して一条大納言と通称する習いがあったからであろう。故に、本歌合の時所位を最も明確にする呼称は「天延三年三月十日一条中納言為光歌合」とすべきであろう。

(平安期歌合大成二)

萩谷氏の御見解は一応うなずけるが、「よしちか君」「参河権守惟成」に加えて「前中宮しらはふ」「兵部大輔輔昭」「帯刀先生長能」等の現在称7番歌の作歌年次から、なおいささかの疑問が無いでもない。

「前中宮しらはふ」の「前中宮」に天延三年当時該当する方が見あたらない。というのは、冷泉皇后昌子は天延元年七月皇太后となられ、懷子、超子、愼子共に女御であって該当しないからである。当時「中宮」と呼ばれたのは円融皇后嬪子であり、天元二年六月三日崩御されたが、その呼称は一貫して「中宮」であった。「前中宮しらはふ」は嬪子中宮に仕えた女房名で、本歌合が天元二年六月嬪子薨去後の三月のことではなかったか、の疑問。

のごとく語られ、『通憲入道蔵書目録』によれば「菅輔昭序一帖」が存した旨であり、やはりあながちにこれらの評価を説話のなせる所産として葬り去るわけにゆかぬ一理を認めて然るべきであろう。ただ起家の抬頭と共に文人の輩出した時期にあつて、なお輔昭の力は菅家累代としての文時のあとを継ぐ事は出来なかった。

一応の詩人としての立場を築き大内記の官につきながらも、その志を全うすることの出来なかった輔昭が、詩文の道に充されないものを、持ち合せた歌才の面に発揮したであろうことは想像に難くない。

四 歌人としての輔昭

（一）現存歌について

輔昭は、『三中歴』歌人歴にその名が記され系譜にも「歌人」とみられるように、詩人であると同時にまた歌人でもある、いわゆる和漢兼作の人であつたといえる。もちろん勅撰歌人でもあつたが、家集を残さず、現在見られる歌の数はまことに少い。

しかし、勅撰集では『拾遺集』三首、『新古今集』一首の入集があり、私撰集では、『如意宝集』『拾遺抄』に一首重ねて入集、『後六六撰』二首、『金玉集』一首、『夫木抄』に一首入り、『前十五番歌合』にも採られている。また『一条大納言家歌合』・『三条左大臣家前裁歌合』にも参加、いずれも歌人として出場した。

現存歌は、これら勅・私撰集、歌合にみられるものの他に、同時代

の私家集の中に散見する数首のみに限られるのであるが、その数少い現存資料の中にも公私の場に於ける輔昭の歌、そして歌を通してみる輔昭及び交友の歌人たちのあるがままの生き方と社会的な背景などのいくらかを垣間見る事が出来そうにも思われる。

（二）歌合への参加

前項に述べたが現存資料による限り輔昭の歌合への参加は「一条大納言家歌合」及び「三条左大臣家前裁歌合」への参加の二度である。

『一条大納言家歌合』は、伝承によれば天延三年三月十日、当中納言であつた為光によって、伊尹から伝領した一条院⁽¹⁴⁾に於て催された、紅梅、帰鴈、柳、歎冬、残鶯、若菜の歌題、六番十二首から成る歌合であつた。

参加者は、主人側の為光の甥であり、為光室の弟でもある義懷をはじめとして、惟成・元輔、長能など相当に堪能な歌人を交えた、中清、敦信、少將源つねかた、ただよし、輔昭、前中宮しらはふ、のかおぶれ。一条家に縁故の深い家司階級の人々を主としていた。⁽¹⁵⁾ 輔昭は、長能と番えて出場、「勝」となっている。

歎冬 左 兵部大輔輔昭^勝

7 春風はのどけかるべし八重よりもかさねて匂へ山吹の花

右 帶刀先生長能

8 底清き井手の川べに影みえて今日さかりなる山吹の花

ら当代の文人たちに伍しての作詩である。

なおこの詩の三、四句は『和漢兼作集』にも採られている。

また、公任と関係の深かったことは後述するが、公任撰『和漢朗詠集』にも撰ばれて二句存する。⁰¹⁾ すなわちその一つは「代^ニ牛女^一待^レ夜」と題する詩

詞^ハ託^{シテ} 微波^ニ 雖^{ドモ} 且^{ルト} 遣^ハ 心^ハ 期^{シテ} 片月^ヲ 欲^ス 為^{セント}

媒^ト

であり『文選』洛神賦に「良き媒の、以て^{ようこ}権^を接^{をも}なく微波に托して辞を通ず」とあるにもとづく作詩である。⁰²⁾ 『江談抄』四には、

この詩句について「古人伝云。此度文時與^ニ輔昭父子^一相^ニ論詩^一云々」と伝え、父子の切磋琢磨の姿を見る。いま一句は、

他時^{ニハ} 縦^ヒ 醉^{フトモ} 鶯花^ノ 下^ニ 近日^ハ 那^カ 離^{レム} 猷炭^ノ 辺^ヲ
であつて、やはり『朗詠集』所収の、文時の詩⁰³⁾ 「看^{ルニ} 無^ニ 野馬^一
聴^{クニ} 無^レ 鶯^ノ 裏^ノ 風光^ハ 被^{レタリ} 火^ニ 迎^ヘ 此^ノ 火^ハ 応^{ベシ} 鑽^{ツテ}
花樹^ヲ 一^{取上} 對^ヒ 来^{ツテハ} 終夜有^ニ 春^ノ 情^一」の詩題「火^ハ 是^レ 臘

天^ノ 春」と同題の句である。文時らと同座しての作であろう。やはり『江談抄』四にも所収されている。

その他『新撰朗詠集』に

早秋詩

初^ニ 葉^ノ 風^ハ 穿^レ 骨^ヲ 入^リ。 第三^ニ 伏^ノ 汗^ハ 謝^レ 身^ヲ 分^ル。

山川千里月

菅原輔昭考

砧^ハ 添^フ 郷^ニ 涙^一 孤^ニ 宮^ノ 外^ヲ。 鶴^ハ 照^ス 皐^ノ 聲^一 一^ニ 挙^ノ 中^ヲ。

銭源能州赴任

家訓^{欲^{スルニ} 聞^{ント}} 残日^{少^シ}。 洛陽^ノ 風月^{莫^ニ 遲^ニ 帰^一}。

〔群書類従〕第三五二所収

の三句が所収されている。いずれも作詩事情については知られないが最後の「銭源能州赴任」について、証明すべき手だてが見出せないのであるが、貞元二年八月十六日の三条左大臣家歌合に共に出詠し、父文時も「老閑行」の草稿を見せたり（『江談抄』五「菅三品老閑行事」）何かと交流のあったらしく思われる源順の、天元二年能登守となり下った時のものではなかったかと思う。詩句からも学問上の交流の程がしのばれるが、もしそうとすれば源氏故に和漢の才を十分にみとめられながらもなお官位の沈淪に甘じなければならなかった順とは立場は違つても何か共鳴し合うものがあつたものと思われる。

詩文についての現存資料は以上のごとくである。『二中歴』によれば『扶桑集』の作者でもあつたらしいが、現存する扶桑集が、その全容を伝えていないため、輔昭の詩文を見る事が出来ないのは残念である。

しかし、『二中歴』詩人歴にその名をとどめ、父子相伝の文章家の一人として

問云。古今父子相伝文章者希歟。師答云。良香子在中。菅家御子淳茂。文時子輔昭。村上御子六条宮。此外無^レ之云々。（『江談抄』五）

「宇多院藏人」が誤りであることは、すでにいわれているごとく『日本紀略』に徴して明らかである。後にふれるが、詩序の文面からしてもこの時輔昭はおそらく冷泉院の藏人だったのであると思われる。山口博氏も輔昭の藏人だった時期を円融朝においておられる(富山大学文学部文学科紀要2「私稿藏人補任(二)」)。

文時の助言を恐れて院を閉じ、輔昭の実力を試したところ、その結びの句が秀逸で称讃されたというのである。『十訓抄』では「菅輔昭詩序不耻祖業事」として同話を袋草紙にもとづいて載せ、後に「余の事故。祖業をつげる事彼伊陟卿には似ぎりけり。」の批評を加えている。

ちなみに「伊陟卿云々」は、当代を代表する属文の卿王兼明親王、息伊陟との比較であるが、特に伊陟卿が「菟裘賦」をも知らない文盲だったという、輔昭の話の直前に位置する説話との比較によって記されたものであろう。

もとより「秀逸」云々と称されたことも説話の語るところ、信憑度には問題があるが、その心は汲んでよいものと思う。

「於レ詩者可レ習ニ文時之躰一也」といわれ自身も又「文章好マム者可レ見ニ我草一」(『江談抄』五)といった文時の薫陶の程がしのばれる。

さて件の結句(『十訓抄』は「自謙の句」とする)

輔昭^{ツシト}派^ニ於^ニ李門之浪^ニ二年。朝恩未^レ及^バ。踏^{ムコト}於^ニ蓬壺之

雲^ヲ一十^日

から、進士に及第して二年、仕途を得ない旨、また漸く藏人として殿上に仕える身となって日の浅いことが知られる。天禄二、三年頃に文章生となったものであろう。そして藏人にえらばれたが、延長半ばの生れとしても既に四十半ばを過ぎる頃である。順が四十三才に至るまで学生であったことはよく知られているが、なお遅れた登龍門であったといわねばなるまい。

輔昭の現存詩文は、前に述べた冷泉太上天皇詩宴の序文・詩の他に

酌一盃惜秋

引得先嫌明日至。傾来只憶此時留。

爵無再勸離情苦。醉未全深去跡幽。

不許高風樽下謝。暫□曉露戸中收。

蕭辰須□劉伶態。爽籟宜随阮籍遊。

遠草初含色

非唯暖雨江南染。復有和風野外加。

消盡雪青湖寺路。霽来煙嬾洞庭沙。

が『類聚句題抄』に見える。後者は輔昭の叔父庶幾、慶保胤、紀齊名らが同題で詠んでいるところからすれば、然るべき場の詩会でよんだものでもあろうか。作詩の年次については明らかでないがこれ

の詞書一つ——それは後述する歌人たちとの交友が、この頃すでにあつたことを暗示する——と、安和二年二月十三日在衡の粟田山莊で催された尚函会での文時の詩を評した『江談抄』第四所収の林露校^{雅規イ}聲鶯未^レ老。岸風論^レ力柳猶強^{尚函會詩品。}輔昭講^{云。}強字誠強也。文時被^レ講可^レ案由。数知案後。申下無^二可^一改字^一由。文時曰。予無^レ計^二所案^一也。があるのみである。(異文に「雅規」とあるので、或は文時の兄雅規の評であるかも知れない。)

天延二年三月廿八日、冷泉院の詩宴が行れた。『日本紀略』には

・日。冷泉太上天皇詩宴。題云。隔^レ花遙勸^レ酒。同日。公宴。詩題云。春色雨中盡。

と記す。

この日、禁中に於ても公宴が開かれたが、輔昭は冷泉太上天皇詩宴の序者をつとめた。輔昭の資料として意味深い唯一の序文である。少し長いが全文引用する。すなわちその序にいう。

春日同^ク賦^ニ隔^テ花^ヲ遙^ニ勸^ム酒^ヲ。応^ズ太^ニ上^ニ皇^ノ製^ニ。

王城ノ東南半里余^ニ。有^二玉洞^一矣。煙霞春濃^{カニ}。泉石秋冷^シ。蓋^シ我^ガ太上皇。叡宸遊之地也。自^リ彼^ノ遁^レ世^ヲ揖^リ尊^ヲ。逐^レ處^ヲ占^メ静^ヲ。謂^ル鶯舞鶴。追^ニ從^ニ于^ニ褰裳之行^ニ。草^ノ色林^ノ輝。祇^ニ承^ス脱屣之步^ニ。於^レ是^ニ于^ニ林^ノ于^ニ臺^ノ。有^レ花有^レ酒。酒^ハ隔^テ花^ヲ而遙^ニ酌^ミ。味^ハ帶^レ香^ヲ而彌^ク醇^{アツシ}。

宿鳥鳴^{キテ}以^テ似^レ說^{クニ}戸之浅深^ヲ。遊蜂繞^テ以^テ如^シ檢^{スルガ}巡之多少^ヲ。嗟呼唱^{フル}遲^ヲ從^{リス}何^レ方^一。經^ニ梅擔^ヲ而舉^レ白^ヲ。記^ス籌^ヲ是^レ幾物^ゾ。過^ニ杏園^ヲ而折^レ紅^ヲ。出^ニ濃粧^{ヨリ}出^ニ繁艷^{ヨリ}。愁眉忽^チ展^ニ眼界之春^ニ。穿^ニ宿雪^ヲ穿^ニ暖霞^ヲ。俗骨欲^ス倒^ニ醉鄉之月^ニ。

于^ニ時鈞天宴闌^ケ。玉漏夢半^{ナリ}。絲竹間^ク奏^ス。咸陽縣之地自^ラ清^シ。觴詠不^レ休^セ。藐射之山欲^ス曙^{ケント}。輔昭派^ニ於^ニ李門之浪^ヲ一二年。朝恩未^ダ及^バ。蹈^{ムコト}於^ニ蓬壺之雲^ヲ一十日。夜飯既^ニ酣^{ナリ}。厭厭然^{トシテ}獨^リ迷^ニ花酒之下^ニ爾^ニ。謹^{シテ}序^ス。

〔本朝文粹〕卷第十

また、この日の輔昭の応制の詩は次のごとくであつた。『類聚句題抄』にみえる。

隔花遙勸酒

礙霞遲酌鶯相唱 穿雪頻傾蝶自馴

心地憂忘梅嶺露 醉鄉路次柳門塵

さて、この詩宴の序者をつとめた輔昭に関して説話があり、『袋草紙』は次のごとく語る。

菅輔昭為^ニ宇多院藏人^一之時、為^レ試、俄賦^ニ隔^レ花遙勸^レ酒詩^ニ以^ニ輔昭^一為^ニ序者^一。而疑^ニ嚴閣之助成^一、閉^レ院不^レ令^レ往^ニ反人^一。一件序落句云、派^ニ於^ニ李門之浪^ニ一二年、朝恩未^レ及^{、踏^ニ蓬壺之雲^一一十日、夜飲已酣云々。世以称^ニ秀逸^一。而文時卿云、踏^ニ蓬壺之雲^一一日ト可^レ書。折^レ指^テ計^{ケル}者哉。(『日本歌学大系』)}

天元五年初秋、石見国から任満ちて帰洛した藤原有国が、その年の初冬橘直幹の来訪を得た時によんだ懐旧の詩の序に、康保年中の文友廿余輩について

于曉康保年中。文友廿有餘輩。或昇^二青雲之上^一。交談遠隔。或歸^二黃壤之中^一。存歿共離。其餘多執^二臺省之繁務^一。亦割^二刺史遠符^一。居止接近。日不^レ暇^レ給。所謂左少丞菅祭酒(資忠)。兵部藤侍郎。太子学士藤尚書(惟成力)。肥州平刺史(惟仲)。美州源別駕。前藤總州。李部源夕郎。慶内史(保胤)。高外史(高兵相如)是也。如^二彼前日州橘太守(倚平)。柱下管大夫(輔昭)。工部橘郎中(正通)。三著作(三善篤信)。命先^二朝露^一。恨深^二夜臺^一矣。(略)

〈傍点 筆者〉 (『本朝麗藻』巻下)

と述べている。有国二十才台の交友らしいが、「康保年中」とはまさに文時の、輔昭のために穀倉院学問料を請うた時期と一致する。有国の文中には「柱下管大夫」として、大内記輔昭の名も見える。有国は文時の門下でもあり、交友のあったことが知られると共に、これらのすぐれた文友が、輔昭にとってもまたすぐれた友人でありえた可能性を思う。

因みに、今井源衛先生は、「勘解由相公藤原有国伝」⁽⁹⁾と題する御論者の中で、『本朝文粹』巻十所収、康保元年三月十五日叡山西坂本に於て初めて行れた勸学会に関する保胤の詩序「五言、暮秋勸学会於^二禅林寺^一、聴^二講法華經^一、同賦^二聚^レ沙為^二仏塔^一」によまれた『翰林書生三十人』と、在国後年の回想にいう「文友廿有余輩」

とは一致する所が多いだろう。』と述べられる。すぐれた翰林学生の輩出したこの時期、文時の願いの学問料が輔昭に下されたか否かについては不明である。

ここで輔昭の生歿についてふれておきたい。生年は未詳であるが、『二中歴』の詩人歴では輔昭を「文時一男」とする。しかし、惟熙が学問料申請時に文章生であったことと、輔昭の学問料申請時との隔たりからして惟熙の方が年長であろうと思われる。又元貞が延長二年の誕生であるらしいことなどから、大体延長年間半ばころの出生ではないかと推定する。

歿年は、「作者部類」には「天元五年出家」とするが、前掲有国の懐旧詩序に「如^二彼前日州橘太守(倚平)。柱下管大夫(輔昭)。工部郎中(正通)。三著作^一(篤信)。命先^二朝露^一。恨深^二夜臺^一矣。」(傍点筆者)とあって、天元五年初秋の有国帰洛までに歿したことが知られる。

なお名前の表記に「輔昭」「輔照」があるが、明らかに輔昭のものとわかる同一資料に二様の表記を用いたものなどがあり、同一人物であることに間違いは無い。

三 文人輔昭として

安和から天禄年間にかけての、明確な資料は殆んど無い。ただ、花山天皇誕生頃的一条摂政伊尹との関係を示す和歌資料『相如集』

天曆十年十一月廿一日、文時は惟熙のために学問料を請うた。⁽⁷⁾累代の家門を守り伝えて行きたい強い希望があったからであろう。しかし、応和二年六月十七日の『日本紀略』には、

此日。召ニ学生藤原公方。菅原資忠。三統篤信。令^下候ニ射場殿一給^レ題賦^上。詩。題云。簞為ニ夏施。筏為^レ韻。七言十韻。件学生等申ニ穀倉院学問料。仍試^レ之。申ニ此料一者文章生橘列相。菅原惟熙。淑信等。而或申^レ障。或申ニ他行之由。一不参。

(傍点 筆者)

とあり、惟熙は欠席している。その後の事はわからないが尊卑分脉によれば左衛門尉、諸陵助を歴任した由である。

輔昭は、以上簡単ながらみて来たとき血族の大半が文章道にたづさわる、しかも父祖伝来の世襲氏族といういわば責任ある立場に位置を占めていたのである。

二 学生時代

前述のごとく、父文時の願いも空しく惟熙は学問料申請者の試験を自らさける結果となった。真壁氏はその理由を惟熙の自信の無さに帰せられたが、恐らくその推測は当たっている。

こうした事情から察して、むしろ当然のことと思われるが、文時は、輔昭にのぞみを托し、紀伝道の家門を継がせるべく強く希望したのであろう。輔昭のために、康保二年、切々たる文面を綴り、穀倉院学問料を請うたのである。すなわち請状にいう。

菅原 輔昭 考

正四位下行式部大輔兼文章博士菅原朝臣文時誠惶誠恐謹言。

請^下殊ニ蒙^二天恩^一。被^レ給^セ穀倉院学問料。無位輔昭ニ状。

右文時爵已ニ四位。儒職兼^ヌニ。古来之人尤モ所ナリ。希ニ有^ル。是ヲ以テ文時齡之衰老雖^レトモ可^シト。歎ク。家之清虚雖^レトモ可^シト。愁フ為^レニ竭^ニ桑ガ夙夜之忠^一。猶ホ纏^ルニ筆硯之役^ニ。但業有^ニ箕裘未^レ能^ハ傳^ル子^ニ。念^フニ此ノ一事^一。五内無^シ聊^ズ。伏^シテ檢^ス案内^一。文章得業生。新ニ欲^ス被^レ補^セ。給料ノ学士。随^ヒテ則チ可^シ有^ル闕。方ニ今輔昭風月之才。似^レ父ニ雖^レトモ。瀟^シシト。文時旦暮之涙。思^フ子ヲ彌^ミ深^シ。去年豫メ企^ニ懇望^一。上^ニ聞^ス中懷^一早ク畢^リヌ。同房諸儒之各言^フ其ノ子^一者。猶ホ亦連署^シ所ニナリ。擧^セ奏^セ也。望^ミ請^フ鴻恩殊ニ垂^ニ憐恤^一。以^テ件ノ輔昭^一。被^レ下^ニ宣旨^一。給^ヒ彼ノ院料^一。令^メ玉^ヘ扇^ガ二門風^一。文時誠惶誠恐謹言。

康保二年月日。正四位下行式部大輔文章博士菅原朝臣文時上。

〔本朝文粹〕卷第六)

六十七才の老齡に至るも未だ父祖の業を子に伝え得ぬ嘆きが「但業有^ニ箕裘未^レ能^ハ傳^ル子^ニ。念^フニ此ノ一事^一。五内無^シ聊^ズ。」に強く表明されている。

こうした父文時の強い望みの下、父祖代々の学儒の重みを両肩にずっしりと感じながら、輔昭も菅家の一員として西曹に学び、祖業を継ぐべく登龍門めざして努力したことであつたろう。

『菅家後集』の「詠：楽天北窓三友詩」に

尚書右承舊提印 吏部郎中新著緋

侍中含香忽下殿 秀才翫筆尚垂帷

自從勅使駟將去 父子一時五處離

とうたわれ、道真の左遷に連座して、昌泰四年正月二十五日、勅使に四人の息男がそれぞれ土佐、越後、遠江、播磨の配所へと連れ去られた旨を述べているが、「尚書右承舊提印」とよまれているのが、輔昭の祖父、道真の長男高視である。大学頭、右少弁を兼ねたが左遷に連座して土佐介に配流された。道真の後、菅家の正統な学問をついだのは、この高視と淳茂の二人であったといえる。

「秀才翫筆尚垂帷」とよまれているのが四男淳茂である。当時いまだ秀才だった淳茂には道真は別に「冬日感二庭前紅葉一、示二秀才淳茂一」をも与えている。やはり左遷に連座して播磨国に配流されたが、父の志をつぎ日夜精勵、式部権大輔、大学頭、文章博士にのぼった。そして菅家の紀伝道世襲氏族としてその学問は在躬、輔正へと受けつがれていった。

一方高視の後を継いだ輔昭の父文時は周知の如き大儒であった。その経歴のみを簡単に記すと以下の如くである。承平三年文章生、天慶五年四十四才にして対策及第。天曆三年坤元録屏風詩を作り天曆十年五十八才にして文章博士となり、翌天徳元年「封事三箇条」を奏進した。又同三年八月十六日「殿上詩合」につらなり、天延二年には正四位下に叙せられた。そして天元三年式部大輔となったが

官位沈滞の嘆きを「老閑行」に托し、両度の申文を奉ることによって、天元四年正月七日従三位に昇り、参議に列したが、その年九月八日、八十三才で薨じた。その間実に醍醐、朱雀、村上、冷泉、円融の五代の長きにわたる生涯であった。その紀伝道学者としての足跡・文筆の数々は多くの資料の語るところである。

叔父にあたる雅規・緝熙・庶幾らも共に文章道の出身である。

雅規は『二中歴』に藤原実頼の撰関侍読⁽¹⁾であったことが見え、また文章博士、左少弁であったことが系図によって知られる。安和二年三月十三日在衡の催した尚函会にも文時と共に列した。⁽²⁾彼の詩文は『本朝文粹』や『類聚句題抄』『朗詠集』にみえているが、淡路、因幡、和泉、山城等の守を歴任し、実務的な官吏としての手腕にも優れていたらしい。⁽³⁾

雅規の子息に資忠がある。輔昭や惟熙には従兄弟にあたる。資忠は、後に述べる惟熙が学問料の申請を出しながら欠席した、応和二年六月の、穀倉院月料申請文章生の試験を受けた三人の中の一人である。⁽⁴⁾ 大学頭、大内記、右中弁を歴任、文章博士となった。孝標の父である。

さて輔昭の兄弟には惟熙・元真・安杲の三人がみえ、元真と安杲は安楽寺の別当に上った。惟熙と輔昭は共に文章道に志したようである。系図では輔昭にその出身を示す「文」の字が無いが、『本朝文粹』所収の冷泉太上皇詩宴の序文により文章生であったことは明らかである。⁽⁶⁾

